

Kanchan Chandra ed.,

*Constructivist Theories of
Ethnic Politics.*

New York: Oxford University Press, 2012,
xvi+500+8pp.

なか い りょう
中 井 遼

I

民族意識（エスニック・アイデンティティ）や民族性（エスニシティ）が、人々にとって本質的な、生得的かつ固定的なものなのか、あるいは人為的かつ可変的なものなのか、といった議論が民族政治の文脈で語られるようになって久しい。民族意識や民族集団の起源に関する理論的・概念的な諸研究の発達を通じて、民族意識ないし民族性は人間にとって生得的なものでも先天的なものでもないことが明瞭になり、今日、民族意識を理解するうえで、そこには構築主義的な側面があるという理解はすでにコン・センスとなってきているといってもよい。

ところが、民族意識が流動的で可変的なものだという知見が浸透した後でも、いざ、民族と政治経済現象の関係に関する実証的研究を行う際には、多くの研究者らは民族集団をひとまず固定的なユニットとしたまま政治経済現象を分析したり、政治経済現象の外生変数として民族を位置づけたりすることが多かった。しかし、民族（意識）のあり方は政治経済現象から独立ではないはずであるし、それに影響されて変化しつつ再び政治経済現象を規定することが考えられるのだから、そのような構築主義的分析的知見は実証的研究に適用可能なモデルを構築するところまで昇華される必要がある。

前述のような問題関心を共有する北米を中心とした研究者（おもに比較政治学者）らが集まり、10年以上の検討期間を経て刊行されたのが本書である。本書の編者、カンチャン・チャンドラ氏は現在ニューヨーク大学政治学部教授であり、民族政党や

インド政治に関する研究で有名な比較政治学者である（主たる業績としてChandra [2004]）。

II

本書の構成は以下のとおりである（各章の執筆者の姓のみ括弧内に記載する。各執筆者に関する情報は後ほど詳述する）。なお本稿では簡便化のため、ethnic identityの訳は「民族意識」で統一する。

- 第1章 イントロダクション（チャンドラ）
- 第1部 概念
 - 第2章 民族意識とは何か——その最小定義——（チャンドラ）
 - 第3章 属性と枠組み——民族意識を考えるための新しい概念語彙——（チャンドラ）
 - 第4章 民族意識はどう変化するか（チャンドラ）
 - 第5章 民族意識変化の組み合わせ数学的表現手法（チャンドラ&ブレ）
- 第2部 モデル
 - 第6章 民族的人口様態（チャンドラ&ブレ）
 - 第7章 民族的人口様態の漸進的変化のモデリング（ファンデルフェーン&レイティン）
 - 第8章 どの程度流動的か？ 民族意識の可変性とアフリカにおける選挙変易性（フェレー）
 - 第9章 民族性と政治的分配——因果メカニズムの仮想実験——（レイティン&ヴァンデルフェーン）
 - 第10章 民族暴動の構築主義的モデル（ウィルキンソン）
 - 第11章 国家の解体と再構築過程におけるアイデンティティ・合理性・感情（ピーターソン）
 - 第12章 レアイベント分析への構築主義の実装——「パンジャブスタン」の出現はいかにして可能か——（ラスティック）

このように、第1部にあたる概念的検討（第1～5章）は基本的にチャンドラが行い、ほかの執筆者たちは第2部におけるそれぞれのモデル研究を通じ

て貢献するといった構成になっている。以下、簡単に各章の内容を、その強調点に着目しつつ概説していく。

第1章のイントロダクションは、冒頭でも述べたような構築主義を組み込んだ実証研究遂行を可能とするような、踏み込んだ具体的理論モデル構築が必要であることが強調されており、また本書全体の概論および構成に関する記述に当てられている。

第1部の冒頭に当たる第2章は、民族意識（ないしそれを共有する集団としての民族集団）をどのように定義すべきかといった詳細な検討である。本書の定義では、意図的に「文化」「宗教」「言語」といった個別要素をその判断基準に採用せず、「相続・継承に由来する（descent-based）属性がその成員資格に不可欠であるような枠組み区分のひとつ」と最大公約数的なものを採用している。本定義を採用することによって、「共通の言語をもつもの」といった定義や「共通の祖先をもつ（という神話をもつ）もの」といった定義では零れ落ちてしまう民族意識のあり方を包含することが狙いである。本章の内容は、Chandra [2006] の改稿でもある。

続く第3章では、民族意識・民族性の「属性」(attribute)面と「枠組み」(category)面を峻別すべきだという提言がなされる。皮膚の色や母語といった、相続・継承されるがゆえに個人が容易には変更できない（本書ではそれを粘性性〈stickiness〉という言葉で表現している）「属性」の次元に焦点を当てることの重要性が強調される。枠組みとはそれを構築する材料であるところの属性の組み合わせによって制限を受けており、属性の組み合わせによって選択可能な複数の「枠組み」のレパートリーがあり（本書ではそれらを名目民族意識nominal ethnic identityと呼称している）、その中から個人の民族意識が選り取られるという整理である（本書ではそれを活化民族意識 activated ethnic identityと呼称している）。

第4章では、民族意識が変化するという現象をどのように説明できるかの理論的な検討（ないし本書における理論的な立ち位置の明示）となっている。変化には長期的な要因と短期的な要因があり、第3章での整理から、変化のパターンは複数（基本的には5つないし4つ）あることが提示される。たとえば、複数の名目民族意識を候補としてもつ者が種々

の要因で活化民族意識を変えたり、改宗や言語習得によって個人が有する属性値を変化させることで異なる枠組みレパートリーを選択できるようになるような短期的なものから、時代や地域的文脈の変化によって、選択できる名目民族意識のレパートリー自体が変化したり制限されたりする中期的なもの、さらには、ある名目民族意識（枠組み）に必要とされるような属性値自体が社会的に変わってしまったり別の属性次元にシフトしてしまうような長期的なものまでである。第4章で解説した種々の変化のパターンを、組み合わせ数学（Combinatorics）でいかに表現できるか模索したものが、数学者のブレ（Cilanne Boulet）との共同執筆となっている第5章である。

第2部は、上記の概念整理を受けたうえで、各執筆者がモデルを構築し、具体的な現象を説明しようとする研究論文集である。ひとつめとなる第6章は前述のチャンドラとブレ自身が、世論調査における民族性回答の比率変化のような現象について、本書のモデルに基づく位置づけを提示している。第7章は、選挙を意識し、選挙後の最小勝利連合を目指す政治的エリートたちが、（第4章で示されたような）種々の民族意識変化のパターンを引き起こすような動員をかける論理を想定し、シミュレーションを通じた分析モデルの構築を行っている。担当は、民族意識の変化に関する研究 [Laitin 1998] や民族紛争研究 [Fearon and Laitin 2003] で有名なレイティン (David D. Laitin) と、エージェント・ベース・モデリングを得意とするファンデルフェーン (Maurits van der Veen) である。第8章を担当するフェレー (Karen Ferree) は、アフリカをフィールドとしたエスノポリティクス研究 [Ferree 2011] で知られてきているが、本書では計量分析を通じて、民族集団間の（潜在的）最小勝利連合の大小およびその変化が選挙変易性（≡政治的安定性）に影響を与えることを実証している。第9章は、第7章を執筆した2人が自らのモデルを用い、「民族意識の活性化と政治的ばらまき (pork) は同時に起こりやすい」という経験的知見への論理付けを試みている。第10章からは、暴力と結びつくような民族意識の活性化を取り扱っている。選挙と民族間暴力に関する研究 [Wilkinson 2004] で有名なウイキンソン (Steven I. Wilkinson) が担当した第10章で示される

のは、潜在的にはさまざまにある各種（名目）民族間の連合のうち、最小勝利連合を成立させるような組み合わせを実現するため（活化民属集団とするために）、枠組みに必要な属性を組み替えたり枠組みのレパートリーを変更する際に、強力な動員力・フレーミング力をもつ暴力という手段が取られるというモデルである。第11章と第12章は、対となる内容になっており、前者を担当するピーターソン（Roger Petersen）が、国家という制度が崩壊したり揺らいだりした場合の民族意識の変化を取り扱うモデルを構築しているのに対し、後者を担当するラスティック（Ian S. Lustick）は、民族意識の変化が国家をゆるがせる分離主義にどのようにつながるのかシミュレーションを行っている。またその際、ピーターソンは感情といった要素との関係を考慮していること、ラスティックは地域的偏在性の要素を考慮していることも特徴である。

III

本書は編著であるものの、その過半はチャンドラによる執筆であるため、本稿の焦点も彼女の研究にあたることになる。とはいえ、さまざまな執筆者が参加している以上、その内容だけでなく政治学史上の評価を少し検討しておきたい。特筆すべきは、編者のチャンドラに限らず、レイティン、ウィルキンソン、フェレー、ピーターソン、ラスティックの各執筆者たちが、いずれも今日のエスノポリティクス研究におけるトップスカラーたちであることである（当初計画ではこれに加えてカリバス〈Stathis Kalyvas〉も1章分担当する予定だったようである）。本書の発刊は2012年であるものの、その端緒はチャンドラをリーダーとする研究集団「比較民族過程研究所」（LiCEP）が1999年に形成されたことにあるだろう。本書の執筆者らは本研究プロジェクトの第1回会合から参加しており〔LiCEP 2000〕、そこでの研究活動を経て出されたとみられる、アメリカ政治学会比較政治部会（APSA-CP）の2001年ニューズレター上での特集記事が、本書に直接つながる内容になっている〔Chandra 2001〕。LiCEP参加者はほかにもたとえばフィアロン（James Fearon）、ヘクター（Michael Hechter）、ポズナー（Daniel Posner）、サンバニス（Nicolas Sambanis）と多士

済々であり、今日の政治学界においてエスノポリティクス研究の中核に位置している研究者らが、10年以上の検討と交流を経て編んだ本書が、政治学史上極めて重要な業績であることは間違いのないであろう。

内容面の評価として、本書は第1部における重厚な概念的検討と、第2部における実証理論への応用を意識した成果の両方が、それぞれに本書の成果となっている。本書で理論的検討を直接行ったのは（ほぼ）チャンドラ一人であるが、上述のように本書にかかわった執筆者ら全員の成果といってもよい。

本書の第1部の概念的検討に関する白眉は、属性次元と枠組み次元を峻別し、またそれに基づいて、民族意識の変化が起こるいくつかのメカニズムに関する統一的な整理（そしてそれを判別する概念整理と思考法）を読者に提示したことにあると評者は解する。本書は、民族意識を変化させる代表的パターンとして大きく5つのあり方を提示している。このような提示に基づくことで、たとえば「動員によって民族意識が変化する」といった政治研究においてありふれた言明を行う際に、それがどのようなパターンによって引き起こされているのか厳密に考慮、検討、説明することができるようになるし、近代化論のような比較的長期的なスパンで起きる民族意識の構築と、種々の要因で個人の活化民族意識が変わるような短期的現象を、同一のフレーム内で説明することもできる。また、民族意識を構成する属性次元の定義として、言語、宗教、文化といった個別の属性の列挙に頼らず、継承ルールという一般化基準を持ち出してきた点も、政治学の文脈においては幾分新しい貢献であるように思われる。

第2部の各種モデル研究に関しては、それぞれが独立した研究であるため個別具体的な評価はできないが、各章がかならず計量分析や、シミュレーションないしフォーマルモデルと組み合わせられている点の特徴として挙げられる。こういった手法は、近年の（とくにアメリカ型の）比較政治研究において、もはや所与の作法であって特筆するような事項ではないためか、本書でもこの点は格段の強調をもって提示されていない。しかし、民族政治研究を、個別具体的な事例研究のみで終わらせずに（本書は各所に現実の事例への言及もちりばめられている）、

より広範な外的妥当性の検証に付させたり、理論的一般化ないしその限界の見極めを行ったりするためには、このような「共通言語」に基づく研究は不可欠である。本書で用いられている分析のなかには、一部難解なものもあり評者もその意義を完全には理解できていない部分もあるが、このようなエスノポリティクス研究がなされることの意義は大きく、今後も隆盛を極めていこう。

無論、本書のみによって、今日の構築主義的なエスノポリティクス研究の全容を網羅的に掌握・整理できるわけではない。たとえば、本書の概念的検討ないしモデル構築は、民族意識の変化のうち、異なる意識をもつようになっていたり、新しいものをもつようになっていたりすることの原因ないし影響についての検討に集約されている。本書は、意識の変更や生成がどのようなメカニズムによって引き起こされたのか考えるための論理的切り分け、概念整理、モデルを提供しているが、すでにある個人によってもたれている活化民族意識の強化や排他化のような問題については真正面から取り上げられていない。第7章と第10章は部分的に本点への考慮も向けているが、基本的には本書のフレームの対象外にあるように評者には解された。構築主義の実証的実装への橋渡しを謳う本書ではあるが、実のところその眼目は民族政治における構築主義的側面の一部のみである（とはいえ最大の一部であることには間違いない）ことには、留意が必要であろう。

また本書の概念的検討のうち、とくに民族意識の定義については、他のディシプリンからみた際に新しさや納得をもって受け入れられるか、評者には判然としない。とくに、民族を定義するさまざまな属性次元を、descent-basedという一般化で纏め上げるアイデアの意義を彼女は重視しているが、長年エスニシティ研究を蓄積してきた文化人類学の世界にいる者からは、今更めて感じられるかもしれない。実際、文化人類学における本分野の大家であるコーエンは1978年の論文[Cohen 1978]でまさに「descent-based」に基づく定義を打ち出しており、当該論文は非常に広く読まれるものになっている。残念ながら本書の参考文献一覧に氏の業績は含まれておらず、参照されていなかったことがわかる。もちろん、これを好意的に解釈すれば、エスニシティ研究という登山に後から参入してきた政治学者ら

が、かつて文化人類学者らが到着したところのある山頂に到達するための、異なる登頂路を開拓したということであるのだから、エスニシティ研究全体からみ際には歓迎されるべきことであるのかも知れない。

本書の内容紹介でも適宜触れたように、実のところ本書で示された諸概念の整理やモデル・実証研究は、すでにそれぞれの執筆者の業績として公刊され、特筆すべき評価を得ている部分も多い。極めて重厚な本書ではあるが、2000年代になされてきたさまざまなエスノポリティクス研究のエッセンスとして、あるいは総決算として、エスノポリティクス研究に（とくに実証理論のアプローチから）従事する者に一度は参照されるべき一冊、また適切な検討と論議を加えられるべき一冊、であると評者は解する。

文献リスト

- Chandra, Kanchan ed. 2001. "Cumulative Findings in the Study of Ethnic Politics." *APSA-CP* 12(1): 7-25.
- 2004. *Why Ethnic Parties Succeed: Patronage and Ethnic Head Counts in India*. New York: Cambridge University Press.
- 2006. "What Is Ethnic Identity and Does It Matter?" *Annual Review of Political Science* 9: 397-424.
- Cohen, Ronald 1978. "Ethnicity: Problem and Focus in Anthropology." *Annual Review of Anthropology* 7: 379-403.
- Fearon, James D. and David D. Laitin 2003. "Ethnicity, Insurgency, and Civil War." *American Political Science Review* 97(1): 75-90.
- Ferree, Karen E. 2011. *Framing the Race in South Africa: The Political Origins of Racial-Census Elections*. New York: Cambridge University Press.
- Laitin, David D. 1998. *Identity in Formation: The Russian-Speaking Populations in the Near Abroad*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- LiCEP (Laboratory in Comparative Ethnic Processes) 2000. LiCEP1 (<http://www.yale.edu/macmillan/ocvprogram/licep/1/index.html> 2014年3月13日閲覧).

Wilkinson, Steven I. 2004. *Votes and Violence: Electoral
Competition and Ethnic Riots in India*. New York:

Cambridge University Press.

(立教大学法学部助教)